

明治後期の啓蒙的歴史雑誌『史学界』について

鈴木正弘

はじめに

『史学界』は明治32年（1899）2月に創刊され、明治38年（1905）9月まで続いた啓蒙的歴史雑誌である¹。歴史分野における学術雑誌の嚆矢であり、今日まで続く『史学雑誌』の刊行から程なく、啓蒙的雑誌とでもいうべき『史学界』は刊行された。本書には明治後期の歴史教育界について考える際に殊の外興味深い点があり、筆者はかつて、整理を兼ねて『史学界』総目次の作成を試みたのであるが、筆者の多忙化と怠惰の故に、この作業は中断したままとなっている。ここではその経過でわかったことを報告することとしたい²。

1、『史学界』の創刊

「1巻1号の広告」（資料3）を中心に『史学界』の創刊について考えてみよう。まず目的をみると、研究の成果発表の場としての『史学雑誌』³に対して、史学の普及を目的とする雑誌であるとする。発行所の富山房は『史学雑誌』を発行する出版社であり、『史学界』を『史学雑誌』と「両々相持」す雑誌と位置付けようとしている。このことは三上参次の「祝辞」（資料2）冒頭においても、

「史学雑誌」の比較的に高尚にして、やゝ研究的なるに對し、頗る平易にして、普遍的の性質を有せしめ、以て両々ならびて、史学の進歩を企図するものなりと。

と述べており、両者を並置して捉えようとしている。車の両輪といったところであろう。

¹ 西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』（至文堂 1961）によれば、明治末期の雑誌界は、明治20年の博文館の創立によって、有望な市場であることが明らかとなり、日清戦争後その傾向を強めたという。本誌もそうした潮流に乗じて創刊をみた雑誌の一つといえよう。

² 『史学界』の総目次は『東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧』122巻（地理・歴史・交通編）（大空社 1997）に目次の影印を収めたものがある。本書には「雑誌別著者名索引」を附している点も便利である。筆者の目指した総目次は、目次と内容を照合して作成するもので研究の基礎資料となりうるものである。

³ 明治22年（1889）『史学会雑誌』として創刊。

史学の進歩を考えれば『史学雑誌』と異なる平易な雑誌は当然企図されるべき性質のものとして認識されていたのである。『史学界』は読者層を「中等教育の学生諸君及世上一般の読史家諸君」と想定している⁴。すなわち『史学雑誌』が研究者のための雑誌であるのに対して、『史学界』は学生と一般の人々を念頭に置いているのであり、『史学界』は啓蒙的性格を有する雑誌として呱呱の声をあげたのである。

ここで注意しなければならないのは、広告主体の富山房は「両々相持」す雑誌といっているが、『史学雑誌』の刊行主体である史学会が新たに刊行した雑誌ではなく、異なる人々つまり「史学界同人」の刊行であり、両者の間には志向の違いが看取されるということである。途中で富山房は手を引くのであり、その経緯は不明ながら、採算や経営上の理由だけではない可能性もあろう。広告では「発起者は斯学専門の学士、賛成者は先進の老儒大家」と表しており、『史学界』発刊を推進した同人は新進気鋭の学士（つまり帝大の卒業生）達であり、対して先学者達を賛成者と位置付けている。もちろん史学会の主要なメンバーの賛成がなければ富山房より刊行されるはずはないのであり、「先進の老儒大家」の中に賛成者のいたことはその通りであろうが、反対者のいなかったことを示すものではあるまい⁵。

それでは本誌を発刊した同人達はどのような人々であったろうか。「発刊の辞」（資料1）に発起人の氏名を記しており、また歴代の関係者を「発起人及び記者」（資料6）としてまとめてみた。この発起人及び記者について『東京帝国大学卒業生氏名録』（1926）によって、確認すると次のような学歴を確認することができる。

発起人名	出身	学科	卒業	発起人名	出身	学科	卒業
本多 辰次郎	愛知	国史科	M31.7	高瀬 武次郎	京都	漢学科	M31.7
堀田 璋左右	香川	国史科	M31.7	村川 堅固	熊本	史学科	M31.7
岡本 勇	三重	国史科	M31.7	蔵田(渡辺)世祐	山口	国史科	M33.7
横山 達三	山口	国史科	M31.7	江崎 誠	長野	国史科	M31.7
高桑 駒吉	群馬	史学科	M32.7	坂本 健一	兵庫	史学科	M31.7

記者人名	出身	学科	卒業	記者人名	出身	学科	卒業
阿部 秀助	福岡	史学科	M36.7	陶山 進次郎	山口	国史科	M36.7
三輪 徳三	山口	史学科	M34.7	杉山 進之助	山口	史学科	M39.7
津田 克太郎	石川	国史科	M37.7	遠藤 佐々喜	島根	史学科	M39.7

発起人はいずれも明治三十年代初頭の卒業生であり、特に明治31年の卒業生が多い。追加される記者に山口の出身者の多いことは着目してよかろう。これは後述する横山達三の人脈を連想させるものである。これより史学界同人は、帝大の卒業生を組織的に組

⁴ 第1巻第1号において、横山達三は祝辞に続いて「尋常中学生諸君に望む」という文章を記している。これは中学生を読者層として期待していることを示すものといえよう。また3巻12号の記事（資料13）においても、「史学界の本領は中学程度の読者のために生れたるもの也」と断言している。しかしこの記事からは中学生の反応は十分でないようにみえる。

⁵ 三上参次の「祝辞」（資料2）の中に、「雑誌学問は人を誤ることあり」と危惧の念を表明しているのは、先学のこの雑誌に関する危うさを婉曲に表現したものといえよう。

織したものではなく、親しい者たちが同志的結合によって同人を結成したものと考えてよからう。この時期の卒業生達は概ね明治の生まれで⁶、学制による新しい教育を受けてきた世代であり、日本における歴史学の体系もほぼ確立した時期である。彼らは新しい歴史学を学んだ新進気鋭の人々であった。こうした新進気鋭の学士達が編集の中心に位置したことは本誌の大きな特徴といえよう。

彼らについて十分な調査を行はなければならないと考えるが、とりあえずわかっている人物についてのみ記しておこう。

横山達三 (1872～1943) 健堂と号し、黒頭巾の筆名で一世を風靡した評論家として知られる。「新人国記」等人物評論で名声を博した。帝大大学院では三上参次に師事し、日本教育史の研究に着手して『日本近世教育史』(同文館 1905)を刊行している。明治32年国学院国史科の主任講師、明治34年に佐賀県立第三中学校、明治37年に大阪・天王寺中学に勤めながら、前掲著作を完成させた。明治39年以後、ジャーナリズムに転じて名を成したという。後述のように史学界の中心人物である⁷。

高桑駒吉 (1868～1927) 明治後期より大正期・昭和初期に至る代表的な通史的概説書の著述家の一人で、その後早稲田大学にて講師として教鞭を執り、大正8年(1919)より東洋大学教授に就任したことが知られる。関東大震災に被災し、その蔵書および稿本の多くを焼失し、程なく卒している⁸。

村川堅固 (1875～1946) 明治35年から39年にかけてヨーロッパ留学、その後東京帝大助教授をへて45年教授となり、昭和10年に退官した。西洋古代史研究を開き、併せて西洋史全般に通じ、現代史についても論じた。

蔵田(渡辺)世祐 (1874～1957) 卒業後中学校教員をへて大学院、明治38年に史料編纂所に入り、大正4年、史料編纂官に任じられる。昭和11年に史料編纂所を定年退官、明治大学に転じる。「大日本史料」の編纂や室町時代の政治史に関する業績で知られる。

本多辰次郎 多数の通史著述がある。

⁶ 年齢と学年の相関は今日のように明確ではない。したがって厳密には各同人の調査を必用とする。なお別稿註(14)において、明治29(1896)年7月に卒業した幸田成友が、兄の幸田露伴と比較して、順調に明治の新教育を受けて帝大を卒業したことを特記していることを指摘している。そうした点からの推測である。

⁷ 『日本近世教育史』(臨川書店 影印 1973)に附された本山幸彦氏の解説による。横山の詳伝を確認することはできなかったが、横山の業績の中に『旧長藩十二士伝』(井原儀と共、深井村にて刊、1891)というのが見える。本山氏の解説によれば、二十歳、山口高等学校の時に、友人と高杉晋作の祭典を行い、刊行したものという。彼は総じて早熟の才人であったことを確認することができよう。なおこうした自己認識は中学生を読者層として期待する心情と通じるのではあるまいか。彼がどのような理由から教育界を離れたのかを知ることはできないが、そのギャップの大きさは推測に余りある。なお横山には『初等帝国史』(大日本図書 1899)や『世界史講義』(小林秀雄と共、大日本普通学講習会編 1913)等の通史著述が見える。

⁸ 拙稿「明治後期における『東洋史』の通史的概説書(1)——主要三著と久保・幸田・河野・高桑の四著を中心に——」(『立正大学東洋史論集』12 2001)「高桑駒吉の西洋史・世界史に関する通史的概説書」(『立正西洋史』18 2002)参照。

坂本健一 高桑駒吉との共著『新撰東洋史』（富山房 明治34年8月）があり、高桑はこの書について「われ等一流の広義の東洋史である。」といい、「漢人種の発達変遷」の歴史を越える指向を有すこと、西洋史との比較対照を考慮して西暦を用いること等を指摘している。両者は「世界史」を指向していた点で類似した志向を有しており、親しいものがあつたようである。『世界史』三卷（明治34年）がある⁹。

江崎誠 『新撰歴史東洋之部』（坂本健一と共、富山房 1899）『中学日本史綱』（依田喜一郎と共、富山房、1905）等の著述がある。

同人の中心となって活動した横山達三や高桑駒吉は帝大の本流とは異なる志向を有していたようであるが、村川堅固や渡辺世祐など帝大の主流となる人物も含んでいる。その他の本多辰次郎・坂本健一等は通史著述家であり、詳細は不明ながら、研究者というよりも教師としての道を歩んだものと思われる。この点さらに追求していきたい。

2、『史学界』誌の特徴

『史学界』誌は「口絵」「論説考証」「史伝地理」「講義」「文苑」「雑録」「解題」「質問応答」「彙報・批評等」「附録」等の多彩な項目から構成されている。特徴的な項目を概観する事としよう。

【論説考証】 学術的な研究論文であり、基本的に一話完結とはせずに、複数号に連載するようにして繋いでいく。学士の肩書きを有した新進気鋭が執筆者の主力である。

『史学雑誌』よりは平易であるとしても、かなりのレベルを維持した論文であると考えられる。

【史伝地理】 研究論文に準じた学術的な論文であり、やはり一話完結とはせずに、複数号に連載するようにして繋いでいく。学士の肩書きを有すもののばかりでなく在学中の学生も寄稿している。

【講義】 特定の主題の入門講座で長期の連載である。

【雑録】 小論または解説。

【解題】 史料の紹介。

【質問応答】 読者より寄せられた質問に対して、編集委員が簡略に答える。その際に質問者もペンネームで問い、回答者もペンネームで答えている。

【彙報・批評等】 トピックやエピソードの紹介。批評はペンネームも多い。

【附録】 文検対策などを扱い、ページ数を巻号を超えて継続しており、後に切り取って揃えれば一冊のテキストができあがるように配慮している。

全体に見てレベルの高い雑誌であり、発信される内容は高度である。『史学雑誌』に比して平易であるとしても、多様な勉強をこなさねばならない中学生のレベルといえるか、

⁹ 前註拙稿参照。

筆者には疑問である¹⁰。そうした面を考慮してのことであろう、読者からの投稿を重視し、また読者層の掘り起こしに腐心したように思われる。投稿の重視という点では1巻1号の広告(資料4)において「江湖の寄稿を歓迎する」と述べ、2巻7号以降「史学界投書募集」としてテーマを設定して投書を募り(資料10)、3巻2号では誌代の割引規定を公表している(資料11)。読者の投稿は、依頼原稿に当然限られるべきものを除いて、基本的にすべての領域に開放されていたようである。その上で比較的投稿しやすいものを用意しており、質問欄の他に「諸国物語」(資料14)のコーナーを設けている。これは地方在住者のための頁と言った趣である。しかし読者からの投稿は必ずしも順調ではないようで、3巻12号では「読者諸君は従来僅かの質問投書を寄せらるゝに過ぎずして未だ一史的論文の見るべきものを送られたるを見ず」と嘆じて、読者の奮起を促している(資料13)。

読者層の掘り起こしのための企画として「日本の人物投票」¹¹というのをやっている(資料8)。日本の75国(地方)別に優れた人物を選ぼうという企画で、「投票は本誌に挿入する用紙に限る」という当たりが、読者層の拡大を目指す本企画の主要な目的なのであり、必ずしも意味がよくわからない点や公平性の保たれているとも思われない点は愛敬といったところであろう¹²。

また同人としていくつかの企画をなしている。菅原道真についての『菅公論纂』(高桑駒吉編、富山房 1902)の刊行やランケ祭の挙行とその様子を伝える『ランケ祭記念講話』を刊行するなどしている¹³。また他に「史学界時代叢書」の出版を計画している(資料12)。執筆回数を整理したのが下表である。執筆の回数によってのみ判断することにはやや問題もあろうが、執筆者が同人に限られることと、高桑の突出していることとを理解することができよう。なお『史学界』停刊によって何冊刊行されたかは明らかでないが、前向きに活動しようとしていたことは理解できよう。

執筆者	回数	執筆者	回数	執筆者	回数
高桑 駒吉	11	阿部 秀助	5	遠藤 萬川	3
本多辰次郎	6	阪本 健一	5	津田 尾山	3
三輪 徳三	6	杉山 浩鴎	3	横山 達三	1
渡辺 世祐	5	堀田璋左右	3	陶山康次郎	1

¹⁰ 筆者は当時の中学生のレベルについて、よく理解していないので疑問としておきたい。

¹¹ この企画は、後に「新人国記」執筆に向かう横山達三の構想であろうことを推測させる。

¹² 因みに武蔵国・太田道観は2321票を獲得して徳川家康の2054票を抑えて当選しており、丹後国・平野国臣は25票で細川幽齋の21票を抑えて当選している。徳川家康は武蔵国・2054票で次点となり、三河では1959票を獲得して当選している。合計では4133票を得ている。本当にその地域状況に即して学ぶべき先人を選ぼうというのであればこのような人気投票は余りにむなしと思われる。

¹³ ランケ祭は明治36年(1903)12月20日に行われている。註8拙稿参照。

3、『史学界』の困難

前述のように『史学界』は大手の富山房から発刊されながら、その後富山房は手を引くこととなった。広告記事（資料 17）はいって簡略であり、その経緯は不明である。「発行所と編集人・発行人」（資料 5）として発行所と中心となった人々を整理しておいた。富山房の手を引いた後は史学界事務局で行い（なお発売所は 5 巻 1 号より文学社、5 巻 7 号より高桑駒吉）、一時隆文館によって引き受けられたが、結局手を引かれて、史学界事務局に帰している。この間に中心となった人物に横山達三と高桑駒吉の名を挙げることができよう。横山達三は創刊時の編集人であり、最終的には発行人兼編集人となっており、本会の中心人物といつてよかろう。既述のように彼は当初教育史の研究に従事し、実際に地方に赴任して、教鞭も執っているの、教育に関心を寄せていた人物であったが、後にジャーナリズムに転じた経緯からも出版に興味を寄せていたのであろう。

高桑駒吉は、富山房から離れた時期の発行人兼編集人である。第 3 巻 6 号は横山の地方赴任を知らせており（資料 7）¹⁴、横山赴任後実質的に高桑が任に当たることとなったと考えられよう¹⁵。高桑の人となりについては拙稿において考察したところであり¹⁶、かなり強力な個性を有するとともに、精力的な著述家であった。高桑の性格が本誌の編集に大きく反映しているものと考えられよう。

3 巻 12 号「見よ卅五年初刷の史学界」（資料 13）は『史学界』の曲がり角に来ていることを示すものと考えられる。次号すなわち 4 巻 1 号より版型を大きくして内容も一層の充実を図ることを公言している。実際の読者層がどのように構成されていたのかを明瞭に示すものは確認されない。しかし創刊以来 3 年を経て「日本の人物投票」を喜んだような大衆的な読者層はついて行けなくなったのではなかろうか。こうした曲がり角に際して史学界同人は安易な大衆化の路線を選ばずに、一方で読者への奮起を求め、一方で版型を大きくしてビジュアル化を図ろうとしたのである¹⁷。なお 4 巻 1 号にも新しい編集方針を掲げている（資料 16）。

読者層の掘り起こしの方向として 4 巻 1 号に教育者に読者層を上げようとする「教育家は史的頭脳なかるべからず」とする記事が掲載されている（資料 15）。継続的にこうした雑誌を購読しうる知的な層は教員とその予備軍である学生や文検受験者ということになろう。すでに創刊号より文検受験者に対して附録において問題解説を試みており、改めて教育界に身を置く読者層を強く意識していることを確認することができよう。しかし実際の教育界の需要と『史学界』の提供する内容の間には大きな溝があるように思われる。史学界同人は帝大卒の新進気鋭の人たちであり、教育界を担う人々との間に大きな溝があったと解すべきであろう。結局の所こうした溝を埋めることはできなかった

¹⁴ 併せて在京編集員の写真を掲げている。なお写真の人物の名前を知ることのできないのは惜しまれる点である。

¹⁵ 高桑の人となりや志向については註 8 拙稿参照。

¹⁶ 前註拙稿参照。

¹⁷ 表紙には「本号より毎号歴史上参考となるべき挿画数拾を加へ一大博物館の偉観を呈す」と明記している。

と見るべきであろう。

おわりに——『史学界』の歴史的意義——

『史学界』誌は7ヶ年という短期間で廃刊に追い込まれているので、経営面では決して成功した雑誌とはいえまいが、歴史雑誌の歴史においては軽視できない意義を有した雑誌であったと思われる。本誌は帝大出の新進気鋭の学士を中心とする啓蒙的雑誌であり、執筆者達にとっては研究発表の場でもあり、同人達は積極的な活動を展開する。しかし投稿を重視する方針を立てても実際の投稿は極めて限定的であるなど、読者層と乖離した面があったように感じられる。また帝大出の学士の数はまだ多くはなく、学閥的に組織の基盤を固めることもできなかったであろう。彼らの想定する読者層は旧制の中学生から教師、あるいはその予備軍であり、創刊号から附録として文検を取り上げたのは、経営の方向としてはまちがってはいなかった。しかし帝大出の彼らにどの程度教育界の求めるものが把握できていたのかは疑問もあり、結局は上からの啓蒙的な色彩の強い雑誌の殻を破ることはできなかったと考える。

この雑誌の形式は後の啓蒙的雑誌や教育雑誌の礎形をなすものと考えられ、月刊で全国に発信した意義は小さくないと考える。またあくまでも学問の王道に立ちながら、学会と教育界、中央と地方の史学界を結ぼうとしたこと、一般の歴史家たちの啓蒙を目指したことなどは後の歴史雑誌の動向を考える上で学ぶべき点、考えるべき点は少なしないと考える。

2002.08.04.総合歴史教育研究会の席上報告した内容に修正加筆したものである。

附、『史学界』関係資料

【資料1】発刊の辞（1巻1号 明治32年2月26日発行）

史界に於ける日進の気運は、その科学的研究を経由して、人生の推移に因果の理法を措定する鋭意にして、已に幾多傑出せる史家の製作は此の点に於きて賞賛すべき成果を収めたりし也。

よしや刻下に於ける史学の到達は、尚帰納法の歩程に存して、未だ這般の理法を発見するに充分ならずとするも、史学が過去に於ける社会生活の経験其の物に生命を与へ、以て将来に於ける社会経営の理想主義を樹立する所以の予件として、便益なる資料を与ふるは、断固として疑を容れざる也。

また史学は教育上の第一義として、幼者をして之を世界にしては、汎く民族興亡の跡に留意して、自ら豊富なる経験を得せしめ、之を自国にしては、吾人の祖先が如何にして天壤無窮の皇運を扶翼して、斯の光輝ある累千年の史を構成せしかを鑑みて、唯に良好なる感情を養はしむのみならず、更に強大なる自覚心を喚起せしめずんばあらず。

而して古来幾多の偉人が、その享有せし賦性、その涵養されし環象、その捕捉せし機会によりて、能く一代の気運を代表し、一国若くは全世界の舞台の上に演奏せし活劇其の物の記述は、洵に気鋭なる年少の嗜好に投合し、如何ばかり其の性格を陶冶するに有力なりけむ、プルターコスが不朽の盛名は一に

それがビイフィバリュレーロイ繋かれる也、

切迫し来れる時事は、邦家の前途容易ならず三千余万蒼生を如何んてふ憂快の言を想ひ起さしむ。曰はく現在の社会を如何んか経営すべき、曰はく将来の国民を如何んか養成すべきとは、是れ刻下の二大問題にして、頃者思想界の産物に漸此の二燃点に集中しつゝあるは、勢の然らしむる所なり。

此の時に方りて「史学界」は出づ其の抱負は如何に。必ずしも多感多情なるシユロツサー其人の流風を逐ひ、主観的史筆を揮麗して、風教を矯正し、社会に蟠崛せる抑圧を掃蕩せんと庶幾するものにあらざと雖、史学が与ふべき当然の智的饗応を以て、吾四千万同胞を待ちつゝも、這般の問題を解釈するに相称なる資料を供給し、以て聊国家進運の発揚に貢献する所あらば、則「史学界」の本誓成れる也。

之を発刊の辞となす。

史学界発起者

本 多 辰次郎
堀 田 璋左右
岡 本 勇
横 山 達 三
高 桑 駒 吉
高 瀬 武次郎
村 川 堅 固
蔵 田 世 祐
江 崎 誠
坂 本 健 一

【資料2】祝辞（1巻1号 明治32年2月26日発行）

文科大学教授 三上参次

雑誌「史学界」將に世に出でんとす。「史学雑誌」の比較的に高尚にして、やゝ研究的なるに對し、頗る平易にして、普遍的の性質を有せしめ、以て両々ならびて、史学の進歩を企図するものなりと。其の目的たるまことによし。而して之に従事せらるゝ諸君は、皆篤学有為の人なれば、「史学界」の成功期して待つべきなり。「史学界」萬歳。

この雑誌の発行せらるゝに當り、謹んで呈するところの祝辞は此くの如きのみ。されども、希くは、この簡單なる式辞のほか、一言せしめられんことを。

予は、学問の孰れの方面に於ても、雑誌といふものゝ、読書社会を裨益することの多大なるを認む。この日進月歩の学問界に在りて、少しも雑誌を顧みざるものあらば其の人は、固陋と譏られずんば、即ち驕慢と疑はれん。されども、予は雑誌の裨益あるを認むると同時に、また或る弊害の、之に伴ふを憂ふるもの有り。この弊害たるや、雑誌其の物に固有するにはあらで、概ね之を読む人の用心如何より来る。規則正しく、一通りの教育を受け、其の学問につきて、浅かれ深かれ根底を有する者にありては、雑誌を繙くことは、最も趣味あり、最も利益あるものにして、之に頼りて時勢後れの人たるを免れ得べし。其の所載の論説を取捨批評し蠟を嚙むが如く淡然たる考証をも玩味し、零細雑駁なる雑録種子をも、己が研索しつゝある知識の範囲内に收拾し、同化せしむるを得べし。昔し、道中をせし人は、出発期あり、到着限りある旅行わりとも、其の人にして道中になれ、健脚にして敏捷なるときは、傍ら、街道附近の神社仏刹に詣で、名勝旧跡を探り得たりと聞く。今日の状態に在りては、雑誌に掲載せられたる事項は、恰も街道附近の神社仏刹の如く、名称旧跡の如し、詣でざるべからず。探らざるべからずとは云へ。其

の漫遊客に非ざる限りは、道中に熟れ、健脚にして敏捷なるを要す。海、山、花、紅葉の眺め佳き辺、古名将の陣没のところ、名僧智識の弘法の間など、面白きものは多くは脇道にあり。或は感極り、興限りなく、低回する能はざらしむるものもあるべしといへども詮ずるところは脇道なり。己が本来目的とする地に達せんには到底、他の奇なく妙なく、平々凡々たる大街道に由らざるべからざるなり。道中になれず、健脚ならず、敏捷ならざるものにして、あながちに脇往還に彷徨ふときは、絶えず日暮れて路遠きの感を免れざるべし。規則正しき修養なく、たゞ夫の雑誌学問をなしたる人は、零細煩瑣なる或いは事実に於ては、或は敬服すべき知識を有するあらんも、惜しいかな、間ま、その知識に統一なく、散漫にして捕捉すべからざるの傾きあらん。帰するところは、学者の学にあらずして、好事家の学となり了るの虞なしとせず。僻陋の地方ある学校教員、若しくは、文部省の教員検定試験を受けんとする人々よりの質問の中には、某の寺には某の手習机あり、如何に。某の家に某の系図あり、如何に。何の戦争は、何日の何時に始まり、何の刻に終わりとるか如何に。何の役には、敵味方の軍勢何程なりしか、何の書の記載するところは誤謬なるか如何に。何等の問題あること珍しからず。予は出来得る限り之に応ふと共に、その質問は頗る専門的なるが、全体の智識は之に伴へるか。又所謂雑誌学問をして、好事家の学に傾きはせずやと警告せし場合、一二に止まらざるなり。

上陳の理由により、予は、この雑誌「史学界」を講読せらるゝ、或る部分の諸君に申すべきことあり。そは、若し諸君の中に、未だ史学の道中に経験を有せられざる者あらば「史学界」を読み給ふとも、之を読むを以て、終学唯一の方法とせず、之と同時に、少なくとも之に要する事と全一時間を、纏まりたる史書を繙くに費やされんこと是れなり。記録、文書の如き、専門的材料はしばらく置き、本邦歴史にありては、中学程度の教科書可なり。国史略皇朝史略可なり。読史余論可なり。国史眼可なり。大日本史、野史可なり。以て、史籍集覧、群書類従、国史大系等のごとく、活字本となりて、手に入り易くなれる書類に進むは、更に可なり。なべての雑誌一冊を読むに要する時間には、是等の史書の一二巻を繙き得べし。而してこの注意は、外国歴史に於けるもまた有効なるべしと思ふ。要するに、雑誌は必要のものなり。然れども、雑誌学問は人を誤ることあり。仮令、其の所載の論説考証は科学的のものなりとも、たゞその雑誌のみに依頼する学問の仕方は科学的のものに非ず。(他の学科に就きては自から然らざるものあらん) 務めて規則正しく学問をなし、秩序を立てゝ書物を読み、以て智識の統一を求むべし。特に、歴史を以て教育の任にあたるものは、古人の逸事を談する場合に於いても、隠居の茶飲話とは、趣を異にすべきなり。

中学教育に於ける歴史に就きては、尚一二の考ふところなきにあらねど、祝辞の附言として、談義の長きに過ぐるは如何あらん。尾りに臨み再び祝せん。

史学界万歳。

※傍点は本来は「○」である。技術的問題から点で示すこととした。

【資料3】 広告（1巻1号 明治32年2月26日発行）

富山房

輓近歴史研究の機運大に熟せるの時に当り、江湖の有志家其適當の機関なきを慨するや久し。従来一の史学雑誌ありと雖も、専門学者研究の結果を登載するものにして、史学暫及の方面には頗る遺憾なしとせず。されば研究の目的を持せる史学雑誌と両々相持して普及の目的を達せんが為めに史学界は生れ出でたり。史学界は中等教育の学生諸君及世一般の読史家諸君の唯一無二の好伴侶となりて日新の文運に裨補するあらんことを期するものなり。発起者は斯学専門の学士、賛成者は先進の老儒大家。材料は豊富にして精選。斬新にして正確。蓋し史学社界の一大明星にして而かも雑誌界に陸離たる異彩を放つものは本誌ならん。惟ふに史学雑誌及史学界共に皆本社によりて発行せらる、実に本社の頭目といふべし。寄語す満天下の読史家諸君、本社が従来史学の為めに貢献したる微衷を諒とし、本社の企画をして

貫徹せしめんことを。

【資料4】 広告（1巻1号 明治32年2月26日発行）

本誌は広く江湖の寄稿を歓迎するものなり。その種類の何たるを問はず、史学に関する玉稿続々投寄あらむことを請ふ。本誌の投稿は左の処へ宛て御送付を乞ふ

東京小石川区金富町四十番地 横山達三

【資料5】 発行所と編輯人・発行人

発行所		発行人		編輯人	
組織	巻号	人名	巻号	人名	巻号
富山房	1-1~4-12	坂本嘉治馬	1-1~4-12	横山 達三	1-1~2-12
事務局	5-1~6-3	岸田貢次郎	5-1~5-6	坂本嘉治馬	3-1~4-12
隆文館	6-4~7-5	高桑 駒吉	5-7~6-3	高桑 駒吉	5-1~6-8
事務局	7-6~7-9	平山 勝熊	6-4~7-5	平山 勝熊	6-9~7-5
		横山 達三	7-6~7-9	横山 達三	7-6~7-9

※5-1~5-6の発売所は文学社。

【資料6】 発起人及び記者

1-1	2-1	3-1	4-1	5-1	6-1	7-1
本 多 辰次郎	○	○	○	○	○	○
堀 田 璋左右	○	○	○	○	○	○
岡 本 勇	○	○	○	○	○	○
横 山 達 三	○	○	○	○	○	○
高 桑 駒 吉	○	○	○	○	○	○
高 瀬 武次郎	○	○	○	○	○	○
村 川 堅 固	○	○	○	○	○	○
藏田（渡辺）世祐	○	○	○		○	○
江 崎 誠	○	○	○	○	○	○
坂 本 健 一	○	○	○	○	○	○
阿 部 秀 助			○	○	○	○
三 輪 徳 三			○	○	○	○
津 田 克太郎				○	○	○
陶 山 康次郎				○	○	○
杉 山 進之助				○	○	○
遠 藤 佐々喜					○	○

※各巻1号に掲載されるもの。なお4-1には一覧記事はない。順番は一部入れ替えてある。

【資料7】「横山文学士の地方赴任」(第3巻6号 明治34年6月5日)

横山文学士の地方赴任は私事なり、然れども吾「史学界」は始め氏の発意の下に起り、久しく署名編輯人として吾人と共に編纂の勞を執られ、本誌が今日に至りしは氏の勞まことに少からず、故に吾人は特に斯にその地方赴任を公にしてわが読者諸君に告げ、兼ねて氏が前程を祝し旧來の勞を謝す、尚氏地方に去るも公務の余暇本誌の為に尽力せられんことは確にして吾人の読者とともに疑はざるところなり、聊送別の辭に代ふ、

【資料8】日本史的人物投票募集(第1巻第9号 明治32年10月5日発行)

蔽帶たる甘棠剪ること勿れは是れ召伯の芟ぢるす所、嗚呼召伯の流風遺韻は則ち百世の下其芟どる所の処をも神聖視せしむるものあるか。思ふに天下何の処か召伯なからん、其性情行徑永く其後世を感化するものあらん、其卓厲風発の事業長へに後世子孫を奮起せしむるものあらん、其流徳遺沢永く其土を豊にするものあらん。今や天下各地の人情風俗殖産地理区々ならず、其由來する所を認めれば、則ち過去に於ける其土の偉人の活動に基するもの豈尠少ならんや。果して然らば吾人は何人か其地に於て最も崇重愛慕せられ、永く後世子孫を動かすつゝあるかを知るの甚だ有益にして且つ興味あることたるを思はずんばあらず。天下の予等と感を同ふするの士思ふに亦少からざるべし。是に於てか本誌は日本各州過去史的人物の投票募集を企て、今後半年を期して投票の結果を觀、當選せる人物の伝を草して本誌の附録として以て天下に頒たんことを期す。満天下の読者諸君希くは左の規約に従ひ続々投票以て予等の志を成さしめよ。

投票募集規約

一、投票は本誌に挿入する用紙に限る

一、人物は、一国一人に限る。但し必ずしも其國に生まれたる人たるを要せず。唯其國と密迹の關係を有せる史上著名の人物を選ぶべし。

一、投票の結果は次号より、毎号本誌に發表す。投票締切は來る明治三十三年三月三十一日とす。

一、當選せる人物の伝は明治三十三年四月の本誌より附録として掲載す。

一、史的人物の逸事普通の史籍に漏るゝも正確疑なきものを寄せられなば伝中に挿入すべし。

【資料9】広告(史学界投書募集)(第2巻第7号 明治33年7月10日発行)

几に隠りて東西の詩書を繙けば何れか感想を動かす種のあらざらんや、而も其想最切に感最深きは史籍なり、史中の事跡と人物とは几上の象形に非ずして嘗て現世に起仆し生死し功勲失過當代を動かし後世に及ぼしたるものなれば、唯世隔り跡遠くして時に模糊の憾あるあるもなほ現世と現身の読者に切なるあり、されば読史の雜感は或は事實の正過に疑を挟む可く或は得失に論を立て得可く、隔世の意氣に感じて私淑の情を禁せざるあれば機微の情勢穿ち得て意外の發見をなすもある可く千種万様見解により境遇により各異なるを得可し、其異なるもの矛盾せるもの撞着せつ者皆一家の見一面の理ならざるあらんや、吾人此に想ふ所あり本誌の余白を割きて一史実にき洽く多数の読者が一家言一私評を乞ひ、趣味津津たるうちに読史見解の新知識を融通せんと欲す、苟も言掲ぐるところの課題史実に関すれば、事實の研鑽は素より、之に関する異聞逸事、是非得失論、文學的科学的感想何にもあれ悉く歡迎一束して誌上に掲げんとす、請ふ続々投寄を賜へ、

題 赤穂義士復讐始末

締切

七月二十五日

制限

一行以上四頁以内

注意 玉稿はすべて東京市神田区裏神保町九番地富山房雑誌部宛にて送られたし
※第2巻第8号（明治33年8月10日発行）以降「史学界投書募集」と記す。

【資料10】史学界投書募集題名（3巻分まで）

2-7	赤穂義士復讐始末	締切	七[八]月二十五日
2-8	南北朝正閏論	締切	九月二十五日
2-9	豊公征韓論	締切	十月二十五日
2-10	楠公は果して意志薄弱なりしや	締切	十一月二十五日
3-2	秀吉家康優劣論	締切	三月二十五日
3-3	源頼朝論	締切	四月二十五日
3-4	徳川幕府鎖国の得失	締切	五月二十五日
3-5	徳川幕府衰亡の原因	締切	六月二十五日
3-6	足利尊氏論	締切	七月二十五日
3-7	シーザル刺殺得失論	締切	八月二十五日
3-8	漢の武帝論	締切	九月二十五日
3-9	甲（信玄）越（謙信）優劣論	締切	十月二十五日

【資料11】投書規約・広告（史学界投書募集）（第3巻第2号 明治34年2月5日発行）

投書規約

投書はすべて史伝、雑録、史談、解題等其材料の種類及長短により本誌参ヶ月分、半ヶ年分、一ヶ年分、二ヶ年分もしくは相当の原稿料を呈すべし（但材料の取捨選択はすべて編者の意見に任すまた投稿は一切返却せず）通信を送られたる人には該通信登載の号に限り壹部を呈すべし

史学界広告（投書規約は表紙の裏面にあり）

- 歴史及地理に関する論文を歓迎す
 - 史界漫録には殊に多数の投稿を望む
 - 珍奇なる史籍及史料の解題を歓迎す
 - 各地方に於ける神社仏閣宮殿城址名称旧跡の由来及伝説、古墳碑碣の存否、史的人物の小伝、史籍史料の発見 等に関する通信を冀望す
 - 玉稿は富山房雑誌部もしくは東京市本郷区湯島新花町九十三番地高桑駒吉宛御送を乞ふ
- ※表面は【史料8】に同じ

【資料12】『史学界時代叢書』出版予告（第6巻2号 明治37年2月5日）

『史学界時代叢書』出版予告

わが『史学界』は已に本号よりして百有五十頁の大冊として生長するを得たり。加之、わが『史学界』の発起人並に記者一同は不肖を顧みず、其全力を尽して茲に左表の如き一大史叢を続刊し、聊か我国の史界に貢献するところあんとす。我国由来殆んど一の完結せる、而もまた頗る適當なる時代史叢のこれ

無きことは好史家の等しく不便とせしところなり。西洋に於ては夙にこの種の出版物多く、就中人も知る独逸の「オンケン」仏蘭西の「ラビス」及「ランボー」英吉利の「アクトン諸氏の指導の下になれるものは其最も著しきものなり、吾人の今より出さんとする史叢は敢てかの歐洲諸大家の作に当ると言はざれども、もし幸にして吾人の小著が一の先驅となりて、将来大成の氣運を慫慂することを得れば則ち足れり。今試にこの史叢の特色をいへば、

- 一、各時代の略史を最も簡明に記述し、特に其要点を指摘して、最も確實なる史的觀念を与ふべし。
- 一、各時代のものを集めて一冊すれば前後よく相連絡したる一大史籍となるべし。
- 一、書中多くの参考書目録を挿入すべき故に、研究者の一羅針たるべし。
- 一、各冊共に、貳百頁内外とし、代価もそれ相当に頗る便利なるものなるべし。
- 一、挿画 挿図をつとめて多くすべし。

要之、吾人の各樂むところ好むところの歴史について最も忠実に研究したる紹介して、世と共に斯道の發達を計りかの當刊の銅臭冊子をしてまた顔色無かしめんとするのみ。

* * *

彈藥は其形細くして醜し、されど其力は大にして非なり

* * *

史学界時代史叢

一、日本歴史の部		十三、印度支那	文学士 高桑 駒吉
一、神代	杉山 浩鴉	十四、印度	文学士 高桑 駒吉
二、上世	文学士 三輪 徳三	十五、波斯	文学士 高桑 駒吉
三、奈良朝	文学士 堀田璋左右	十六、中央亞細亞	文学士 高桑 駒吉
四、平安朝	文学士 阪本 健一	十七、「サラセン」	文学士 阿部 秀助
五、武門勃興時代	文学士 横山 達三	十八、西域	文学士 高桑 駒吉
六、鎌倉時代	遠藤 萬川	三、西洋歴史の部	
七、南北朝	津田 尾山	一、埃及および西南亞細亞	文学士 高桑 駒吉
八、室町時代	文学士 渡辺 世祐	二、希臘	文学士 阿部 秀助
九、戦国時代	文学士 渡辺 世祐	三、羅馬	文学士 本多辰次郎
十、織豊時代	文学士 渡辺 世祐	四、民族移転時代	文学士 阪本 健一
十一、徳川初世	文学士 阿部 秀助	五、東羅馬	文学士 阪本 健一
十二、徳川中世	文学士 陶山康次郎	六、西羅馬	文学士 高桑 駒吉
十三、徳川季世	文学士 本多辰次郎	七、政教衝突	文学士 堀田璋左右
十四、維新史	文学士 本多辰次郎	八、十字軍	津田 尾山
十五、明治史	文学士 高桑 駒吉	九、文芸復興	文学士 本多辰次郎
十六、外交史	文学士 高桑 駒吉	十、海陸発見	文学士 三輪 徳三
二、東洋史		十一、宗教改革	文学士 阿部 秀助
一、三代	文学士 高桑 駒吉	十二、西班牙興隆	文学士 阿部 秀助
二、春秋戦国	文学士 本多辰次郎	十三、英仏交渉	文学士 渡辺 世祐
三、秦漢時代	文学士 三輪 徳三	十四、仏蘭西革命時代	杉山 浩鴉
四、三国	文学士 阪本 健一	十五、反動時代	文学士 三輪 徳三
五、五胡時代	文学士 渡辺 世祐	十六、普露西亞勃興	文学士 三輪 徳三
六、南北朝	杉山 浩鴉	十七、南北亞米利加	遠藤 萬川

七、隋唐時代	文学士 阪本 健一	十八、西力東漸史	文学士 三輪 徳三
八、宋金	遠藤 萬川	* * *	
九、蒙古時代	文学士 高桑 駒吉	以上三部共に目下原稿整理また印刷中	
十、明朝	津田 尾山		
十一、満洲朝	文学士 堀田璋左右		
十二、韓半島	文学士 本多辰次郎		

【資料13】見よ卅五年初刷の史学界（第3巻12号 明治34年12月5日）

史学界生れてより已に三星霜巻を積むこと三十有六如何に我学界の為に貢献せしか吾輩顧みて大に江湖に誇らんとす他なし記事の精新なるにあり材料の豊富なるにあり新説を紹介するにあり世界史学上の学説を報道するにあり然れどもこれ史学界の本領には非ざる也。

史学界の本領は中学程度の読者のために生れたるもの也。史学界は読者の史的趣味を喚起し増進せしめんとするもの也。

然るに読者諸君は従来僅かの質問投書を寄せらるゝに過ぎずして未だ一史的論文の見るべきものを送られたるを見ず、吾輩大に之を悲まざるを得ず。何ぞ夫れ健筆一枚を吝んで堂々たる大雄編を投寄せざる、本誌之を得れば喜んで之に附評し読者と共に研究論議し史界の論戦を試み東西に走せ古今を通じ啓蒙發微万丈の大気焰を吐きて目覚しき花を紙上に点綴せんとす。新年初刊の史学界は実に此大覚悟を以て出づるもの也この期、豈一の進歩に非ずや即ち紙面を拡大し四六二倍となし、表装対面を刷新して読者に見えんとす。

若夫れ記事体様に至りては精練更に加はり吾輩同人専心一意我学界の隆昌を計らん也。

史学界初刊の抱負実に如此紙幅の拡大、史伝、雑録、史談、答問、彙報何れも精選材料愈々豊富蔚然として史界に大光輝を放たん歴史研究者よ請ふ筆硯を呵して来れ吾輩同人大卓を拭ふて之を待たんとす。

明治三十四年十二月

史学界記者謹白

史学界は紙面を拡大して定価を左の通り改正仕同時に発行日を十二日に変更候間不相御愛読奉願上候

合資会社富山房雑誌部

一部	定価金 拾貳銭	六部	前金六拾六銭
十二部	前金壹円貳拾銭	全国無通送料	

【資料14】諸国物語（1巻1号 明治32年2月26日発行）

其跡が諸国物語は種彦が諸国物語となりぬれど、我諸国物語はさる空華幻翳の浮きたる際ならず、さればとて 勅して諸国に徴せし風土記のむづかしき類にもあらず、天を屋とし地を席とし、七寸の草鞋に天下諸国の山川を跋涉して、観旧聞老の志願を果たすの代りに、彙報子が化身 管城子、本欄の一隅をかりて諸国の読者諸君と共にこゝに諸国物語所を起こさんとするなり、諸君が実践踏査を経たる古今地理上の変遷、寒煙の裡に埋もれたる断碣残墳、松風蘿月の外に訪はれざる旧社古刹、さては幾年の昔鬼啾々たりし古城址、古戦場、或は不出門戸の珍籍奇書、蠹魚の棲居となりゆく断簡零墨、たしかなる史的口碑伝説等、すべて闡幽發隱の史的雑話を此处に寄せられんことを切望す、但頁数限あるの誌上なれば、記事は簡潔明晰なるを期するを以て、端書に所載し得るを限る、唯夫れ其事に至りては苟くも史

の及ぶ限りに於ては、茫々たる上下幾千年の今昔をとはず、南極の北、北極の南、天の東崖、地の西角、坤輿の上は何れの国、何れの事変たるを顧みざるなり、一枝の筆を載せて天下を周遊して異聞を広むる既に快ならずや、満天下の読者諸君、請ふ奮て此所に来りて共に快談せられんことを、

【資料15】教育家は史的頭脳なかるべからず（4巻1号 明治35年1月1日発行）

史学界 記者

趣味あるは我が国の歴史なり。昔は東湖歌うて曰く、「天地正大氣、粹然鍾神州、秀為不二嶽、巍々聳千秋、注為大瀛水、洋々環八州、発為萬朶桜、衆芳難与儔、凝為百鍊鉄、鋭利可断鋸、（中略）神州孰君臨、萬古仰天皇云々」是れ豈に我が日本帝国の純美純善なる国土と歴史とを諷へるものにあらずや。宇内広く坤輿大なりと雖、何れの国か亦此の如く善美なる国土と歴史とを有するものぞ。然り美はしき国土の中に美はしき歴史は描かれたり、美はしき歴史の間に美はしき国民性は作られたり。宜なるかな、日本国民が、生れながらにして史的趣味に富めるとや。されば此の美はしき国土と歴史とを難れて、我が国民性は解すべからず。苟も職に国民教育の任にある者、亦少くとも史的頭脳を有せざるべからざる也。何となれば史的趣味の鼓吹は、我が国民の精神的修養に重大なる関係を有すれば也

例へば教場の一講話と雖、歴史に通ぜざれば、児童の興味を喚起すること薄く、随つてその効果を収むること少し。然るに今若し史に精しき教師なりとせんか、理論の没趣味、乾燥なるも、之れを潤沢するに古今東西の逸話伝説を以てし、児童をしてその伝奇的趣味を満足せしめ、興会津々去る能はざるの感あらしむるを得べし。如何なる学科にも史学を適応せしむるの要あるが如く、児童教育の上に於いても史的事実を応用して、児童の伝奇的好奇心に投じ、以て品性の修養に資すべきは言を俟たず。況んや我が国の如き美はしき歴史を有するの国に於いてをや。

歴史は事実を繰り返す、古の歴史は尚ほ今の歴史なり。故きを温ねて新しさを知る、是れ歴史研究の貴むべき所以にあらずや。和氣清麿を生みたる歴史は菅原道真を生みたる歴史なり、楠木正成を生みたる歴史は北條時宗を生みたるの歴史なり、豊臣太閤を生みたるの歴史は近くは西郷南洲を生みたるの歴史なり、而して弘安の役に奮闘したる国民は等しく是れ日清戦争に美名を世界に轟かしたるの国民なるを思はゞ、歴史が如何に事実を繰り返すものなるかを知ると同時に、また歴史と国民とが如何に緊密なる関係を有するか、我が国民同胞が如何に深く祖先の歴史に感化せられたるか、はた史的趣味の鼓吹が児童教育否国民教育の上に如何に多大なる効果を与ふるものなるかを知るに足らん。吾人がこゝに敢て大声疾呼して特に教育家は史的頭脳を養はざるべからずと唱ふる所以は是れのみ。

【資料16】史学界（4巻1号 明治35年1月1日発行）

本誌本号より改善進歩の法を講じ、読者諸君と共に相携へて、研究論議を尽さんことを宣言したり。

惜むらくは、本号未だ其の目的を尽すの余日を得ずして出づ。吾輩同人宣言のその十の一を満たすを得ざるのみならず、熱心なる愛読者諸君の意見を容るゝ能はず。遺憾不過之と雖、亦大に期する所なきに非ず。

伏て請ふ。熱心なる読者よ。篤学の君子よ。本誌に就て不満の点を指摘せられよ。如何なる組織、如何なる体面が欠点なるかを。

本誌は一に読者の意見に任せて目的を達せんとするものなれば、乞ふ些かも憚る勿れ。必ずや之を採

りて、改善の実を断行すべし。

今回の拡張に際し、読者に不便を与ふるなからんことを期し、新たに文学士三輪徳三、在文科大学阿部秀助の両氏を増聘して、萬遺漏なからしめんことを期したれば、敢て愛顧諸君に紹介す。

本号材料に関しては国史、東西洋史より採りたるも挿画は多く東洋史、西洋史を採れり。之れ偏するの観なきに非ずと雖、読者の見解を広からしめ目新しからんと推測したればなり。

次号には一層奇拔雄大なる挿画を選抜して陸續登載すべければ、以後の史学界は大博物館の歴史部を觀覽し、傍ら史学を攻究するの偉觀を呈すべし。

投稿者は必ず廿七字詰に原稿を認められ度。長短は随意とす。

【資料17】本誌発行所変更と記者増聘（5巻1号 明治36年1月1日発行）

本誌は従来富山房にて発行せし処本年より文学社に変更し益々史学の普及を啓かんと欲し更に文科大学々生陶山・津田・杉山の三君を増聘し哲て初志を貫徹せんことを期す読者乞ふ之れを諒とせよ

【資料18】稟告（7巻1号 明治38年1月1日発行）

近来諸物価騰貴の結果原料仕入の如き自然高直に相成り候に付本号より定価改正金拾貳錢に直上候間御承知被下致候。

一冊金拾錢の割にて前金御預り置候向へは別に申上げず候へども改正によりて不足を生じたる分は御送附被成下度候。

本号以後の前金割引は奥付本誌定価のところを御覽被下度候。

明治三十八年一月一日